

第20章 阿波原種農場における業績
(昭和24年～昭和44年)

第1節 業務の変遷

第2次大戦の終戦直後は逼迫した食糧不足を解消するため、関係機関あげての増産運動が展開された。阿波原種農場(当初は久勝原種圃場)はこのような、昭和24年に食糧増産の基本となる稲麦の原種生産を目的として阿波郡久勝村に設置された。昭和32年に阿波原種農場となり、同44年に場の機構改革で農場が廃止されるまでの20年間、その事業が続けられた。圃場面積は約90aで水稻、裸麦、小麦の原種栽培が行われたが、昭和32年にナタネ、昭和35～36年には陸稲も一部採種された。生産状況は業績の項に示すとおり、年次差はあるが、本県の奨励品種の殆んどが栽培され、昭和25～32年では稲、麦ともに15～20石、33年以降は水稻で2,000～2,500kg、麦類は1,500～2,000kgの原種を生産し県下に配布した。

原種の生産は、富岡分場(水稻、麦類)、池田分場(陸稲、麦類)、本場(主として原々種)でも生産されたが、阿波郡は本県でも特に良質な米麦の主産地であり、優良種子としてその評価が高く、新品種の早期普及と種子更新に大きく貢献した。

また阿波原種農場は地元農家と密接な関係があり、こうした原種生産のほかに品種を中心とした各種の試験も実施された。水稻および麦類の品種比較試験は開設以来継続(昭和25～43年)実施され、本県の高収地帯を対象とする奨励品種選定の貴重な資料を作成した。その他の品種試験では水稻の早植栽培、直播栽培があり、さらに大豆、ナタネなどの品種も検討されている。栽培試験では水稻の並木植、培土栽培、節水栽培、開田不稔、除草剤、麦作では、播種期、施肥法、除草剤などに関する試験が数多く精力的に実施された。